

久保貞次郎論

—— 初期の交友・瑛九を中心に ——

太 田 將 勝*

(平成14年10月31日受付；平成14年12月16日受理)

要 旨

1930年代から第2次世界大戦の戦中戦後をはさみ、90年代末に至る約半世紀の間、広義のリベラリズムと美術教育の推進と指導を通し、その透徹した思想と主張を貫いた久保貞次郎の生涯は、まことに稀有なものであるといえよう。いわば普遍的な真・美の規準を持しつつ、公平・公正の精神に徹し、偽善・欺瞞の翳りのない言説や行為、運動に終始しえたことは、まことに驚嘆に値する。

氏の没後4年有半を経過した今、久保佳世子夫人、久保・小此木両家、関係の方々の協力を得、現時点で押えられる広汎な資料を収集しつつ、その思想と実践の意味とを掘り下げ、氏の運動の意義を総合的にふりかえることは、おそらく時宜にかなったことであろう。

本稿は、そうした構想・方向にもとづき、氏にかかわる伝記的事実を巨細にわたってながめながら、困難な時代を背景に所信を貫いたその生涯と思索の跡を永劫にとどめようとするものである。

KEY WORDS

a study on juvenile pictures and drawings 児童画研究
art education 美術教育

1

1982年（昭和57）早春3月の5日間、筆者は、造形作家の池田龍雄氏を伴って、故瀧口修造夫人綾子さんの練馬の仮住まいのお宅に伺い、毎日数時間、瀧口氏旧宅の書斎にあった諸々の絵画やオブジェやメモ類などの整理をして過ごしていた。その頃、富山県立近代美術館の学芸専門職だった筆者は、「第1回現代芸術祭—瀧口修造と戦後美術—」なる特別企画を抱えており、同家にあった無数の資料や作品の調査・整理のため、富山から上京し、東京のホテルに泊り込んで、東京在住の池田氏と毎朝最寄の駅で落ち合っては、連日瀧口家に通っていたのだった。⁽¹⁾

この企画は、戦後日本の前衛美術の展開をあとづけ、回顧・総括しようという試みであった。戦前から、無名の青年たちを造形や音楽など種々の分野の芸術家に育てあげたことで知られる美術評論家瀧口修造を中心に、周辺の数多の作家たちを取りあげ、美術、文学、音楽と境界を越えて広がる往時の青年芸術家たちの熱気と意気とを、美術作品の展示や現代音楽や詩の朗読会をからませながら、立体的に再現・構成しようとしたのであった。⁽²⁾

* 芸術系教育講座

思えば、憑りつかれたように始めた20世紀美術の調査もすでに10年を経過していた。元々近世日本美術史出身の筆者には、範囲があまりにも広く、関係の人士が世界各国各地に広がりをもっていたため、この現代美術の世界は、当初取り組むのに相当骨が折れた。こうした特別企画の構成上のセクション設定や作家選定には、この世界特有の情報と繊細なバランス感覚が必要だったので、館長の小川正隆に相談し、大岡信、東野芳明、武満徹といった人たちにはゲストキュレーターとして、出品作家の1人池田氏には、非公式に助けてもらうことで、仕事の進捗を図ったのであった。⁽³⁾

この企画の見せどころのひとつは、故瀧口修造の書斎の再現だった。アトリエ風の書斎に雑然と（しかし、いかにも魅力ある配置で）並べられていた周辺の作家たちの小品を、美術館内に小室を作って、書斎とその内部までをも再現しようという試みであった。この小部屋を思いついたのは、小川氏や東野氏であり、瀧口が生前口にしていた「オブジェ・ショップ」（デュシャンは瀧口に、1964年3月、オブジェ・ショップのタイトルとして、Rose Sélavyの命名を許している）に結びつけ、この特別企画の核に据えたのだった。⁽⁴⁾

東京の新宿西落合に戦後早々からあった瀧口氏旧宅は、1979年（昭和54）7月1日の修造死没後、綾子夫人が引き払い、夫人は蔵品、蔵書とともに練馬区の仮寓に移り住んだ。かつて旧宅の書斎の壁面を飾り、あるいはテーブルや床に立錫の余地なく置かれてあった種々の小物や小品は簡素な仮寓の室々に、その頃無造作に積み上げられていたのであった。

筆者は、戦後の美術や関連の事象に詳しい池田氏に尋ねながら、油絵、版画、板絵の小品、手紙や葉書、おもちゃともオブジェともアクセサリーともつかぬ数々の小物を、定規や巻尺で採寸し、仮題をつけ、作者のわかる場合は作者を、一枚毎にカードに細々と書き込んでいく作業を日がなし続けた。そこには、ジャスパーやミロやサム・フランシスがかった。マン・レイやムナリーやミショーもあった。こうした中に、北川民次、利根山光人、オノサト・トシノブ等の日本人作家の名を見つけたが、やがて、瑛久の油絵の小品が筆者たちの注意を惹いた。一見煤けたような渋い臙脂の画面のそこここに、細かい点描様のタッチが誠に印象的であった。

このオブジェ・ショップの世界を構成する作家は、微妙に貞次郎の周辺の青年作家たちに符合した。たしかに、貞次郎と瀧口修造はいくつかの接点があった。1952年（昭和27年）5月の創造美育協会設立時には、瀧口は委員の一人として、画家、美術史家、美術評論家の一群の中に名を連ねていた。そして、瀧口と交流のあった青年画家たちの多くは、貞次郎を敬愛する広い意味での創美の仲間でもあった。⁽⁵⁾

戦前の軍部や官憲の重圧に屈することなく、抵抗と不屈の精神を最後まで貫き通した2人であれば、しかも、ともに実作家でない評論家という共通の立場からも、目指す文化や教育への方向や願いという観点からは、かなり重なる部分があったとしてもおかしくはない。

久保貞次郎について、同時代の瀧口修造との比較において論ずることは、ある意味では重要なことかもしれない。しかし、この課題は後回しにし、とりあえずは、貞次郎と瀧口が共通に接点をもった幾人かの作家について紹介し、作家たちを通して、貞次郎の思想や人となりを考え、いずれ別項を立てて、瀧口との比較について論じたいと思っている。

2

久保貞次郎の初期の交友を語る時、逸してはならないのは瑛九の名である。

瑛九は、いわば貞次郎が発掘し、育てた実作家の1人であるが、やがて、貞次郎のもっとも信頼する作家として活動した。貞次郎が発掘し、支援した多くの作家と異なる点は、瑛九は貞次郎の思いや考えを代行・代弁してでもいるかのように、制作し、40歳代で逝ったことである。先ず、その生涯をしばらくふり返りたい。

瑛九は、1911年（明治44）4月28日、宮崎県に眼科医・杉田直の第3子次男として生まれた。第1子・君子（のち郡司に嫁す）第2子・正臣、そして、第3子が秀夫である。秀夫は後年瑛九を名乗った。

1924年（大正13）宮崎県立宮崎中学校（旧制）に入学したが、2学期から登校せず、翌25年3月正式に退学。4月上京。日本美術学校洋画科に入学したが、5月退学。

秀夫は、中学在学の頃からすでに創作童話を少年雑誌に寄稿していたが、やがて1927年（昭和2）頃、「逝ける万鉄五郎の芸術を論ず」、「村山槐多の芸術」、「画事雑考」などを『アトリエ』、『みづゑ』誌に発表、早熟な天才を以て知られるようになった。他方、油彩画の大作にもとり組んでいる。

1930年（昭和5）、オリエンタル写真学校に入学。こののちフォトグラムの制作を始めるが、油彩画、木版画等も続行しており、同時期、木版画研究の小団体「抒情社」の結成にも加わっている。

1932年（昭和7）油彩画を二科展など中央の公募展に出品したが入選できず、しばらく低迷状態は続いた。

秀夫が貞次郎にはじめて出会ったのは、1935年（昭和10）11月、宮崎でのことである。日本エスペラント学会特派使節として、九州巡回中の貞次郎が、同学会宮崎支部代表・杉田正臣を、杉田の姉・郡司君子の邸に訪ねたことは先にも触れた。この時、貞次郎が面談した人たちの中に、末弟の秀夫がいたのであった。

翌1936年（昭和11）2月、東京本郷元町のエスペラント学会本部において、秀夫は貞次郎と再会。翌日、牛込砂土原の久保邸を訪ねている。これ以後、貞次郎との交信は頻繁に行われたが、やがて秀夫は貞次郎から「瑛九」の名をもらい、以後終生その名によって、作家活動を行ったのだった。

この年（昭和11）4月、瑛九の名でフォト・デッサン集『眠りの理由』（紀伊国屋画廊）を刊行。『みづゑ』等にも作品が掲載された。グループ「同時代」を結成、「新時代洋画展」の同人ともなっている。前年、宮崎においては、洋画研究団体「ふるさと社」の結社を推進した。

1937年（昭和12）、自由美術家協会の創立に加わり、同協会第1回展に作品を発表している。その頃、油彩で抽象画を制作、フォト・デッサンやコラージュ作品を試作した。

1938年（昭和13）、東洋的な方向を模索し、南画風の作品を試作した。この頃、貞次郎を北川民次に会うように勧め、貞次郎の北川訪問の際には自らも貞次郎に同行、北川に会っている。この年から翌年にかけて、真岡の久保邸に折々宿泊した。

1939年（昭和14）、自由美術家協会会友に推される。1941年（昭和16年）、同協会を退会、1949年（昭和24年）復帰、1951年（昭和26年）には、再び退会している。

1943年（昭和18）、前々年から印象派の再検討を始め、点描に進み、この年フォーブ、キューブ、アブストラクト風の作品を次々制作する。

1951年（昭和26）5月、大阪の泉茂、河野徹、棚橋紫水、早川良雄、森啓、吉田利次、宮崎

の内田耕平、郡司盛男、外山弥と10名で「デモクラート美術家協会」を結成。大阪市立美術館でその第1回展を開催した。

1952年（昭和27年）、デモクラート美術家協会「第1回東京展」（銀座松島画廊）開催。蠶嘔、池田満寿夫、磯部行久、加藤正、河原温、利根山光人、福島辰夫、細江英公、山城隆一、吉原英雄らを会員に迎えた。5月、「創造美育協会」創立。貞次郎、北川民次、室靖らが中心となり、多くの青年画家が賛同。こうした空気の中で、創造美育協会とデモクラートとは相互に協力することとなる。瑛九は、この年各地でフォト・デッサン展を開催。1950年（昭和25）から、久保邸でエッチングの試作をしていたが、この頃、エッチング作品集『小さき悪魔』、『不安な街』を刊行した。

1953年（昭和24）、フォト・デッサン作品をニューヨーク近代美術館主催「トップズ・イン・フォトグラフィー展」や国立近代美術館主催「現代写真展」に出品。

1954年（昭和25）5月、「デモクラートのエッチング展」（大阪阪急画廊）に、泉茂、加藤正らと作品を発表。瀧口修造企画「瑛九油絵展」（タケミヤ画廊）にも出品した。

1955年（昭和30）1月、「瑛九フォト・デッサン展」（高島屋画廊）開催。久保貞次郎企画、詩画集『スフィンクス』刊行。これは瀧口修造の詩と北川民次やデモクラートの会員の作品で構成したもの。3月、日本アンデパンダン展に出品。9月、デモクラート協会会報を発刊した。

1956年（昭和31）、瑛九のフォト・デッサン作品が、アメリカの写真雑誌『フォトグラフィー』、『アート・フォトグラフィー』に掲載・紹介される。8月、『やさしい銅版画の作り方』（共著、門書店）刊行。同月、第5回創造美育全国セミナー（長野県戸倉町上山田温泉）会場で、瑛九らデモクラート会員によるエッチング講習会が開催され、盛況を博した。こののち、瑛九はリトグラフにとり組んだ。

1957年（昭和32）6月、デモクラート美術家協会解散。久保アトリエ（真岡）に大作「カオス」を寄贈。

1958年（昭和33）池田万寿夫、蠶嘔との「版画三人展」、少しあとに「瑛九石版画展」（福井市）、「瑛九油絵回顧展」を開催。5月、「北川民次と瑛九の油絵回顧展」（真岡市商工会議所）が開催された。

1959年（昭和34）、油彩画の大作にとり組んだ。オノサト・トシノブ、難波田龍起らと日本抽象作家協会の設立に腐心したが、不成立に終わった。11月、慢性腎炎で入院したが、1か月で退院する。（新年1月再入院）

1960年（昭和35）2月、「瑛九油絵展」（兜屋画廊）を開催。大作9点を展示。3月10日、急性心不全のため逝去、享年48歳。4月、国立近代美術館において「四人の作家展」が開催される。菱田春草、高村光太郎、上阪雅人と瑛九。5月、「瑛九遺作展」（福井市）。11月、宮崎県より宮崎文化賞（芸術部門）が追贈される。⁽⁶⁾

3

瑛九は、長谷川三郎、オノサト・トシノブ、坂田一男らとともに、それまで日本の画壇になかった抽象絵画を日本の風土に植えつけ、育てたいわば功労者である。「近代化を装いながら、背後では、封建制とあいまいさと低回趣味のあふれた現代日本で、近代的精神の火を燃やしつづけ、その芸術を豊かにしてきた」一人であった。兄妹とともに早くからエスぺラントに関心

が向けられていたことは、彼の目が、すでに広い世界に見開かれ、やがて権威主義を嫌い、自由を欲する後年の彼を予告している。⁽⁷⁾

彼は、熱心な実作家であったが、同時に後進を教育・啓蒙しようとする誠意と正義の人であった。主宰するグループの名をエスペラント語の「デモクラート」(民主の民)とし、機関誌『デモクラート』誌上ではことごとに公開討論の場を設えるなど、自由・解放を目指す真摯な気風が青年たちの支持を受けた。⁽⁸⁾

1930年(昭和5)、24歳だった瑛九は、「伝統的桎梏」から感受性開放を目指すシュルレアリスムに惹かれた。かくして、一時、超現実主義的画風をつづけたが、『ミノトール』や『カイエダール』誌上のマン・レイのフォトグラムに触れ、やがて、瑛九独自のフォト・デッサンの創始へと向かうこととなる。⁽⁹⁾

制作にあたっては、自らに忠実であろうと努めた。しかし、それは道徳的真面目さなどではなく、「自由を妨げるものはいつでも拒否しようとする非妥協の本能的敏感さと、鋭い知性の判断」があったからだ、貞次郎は見る。

「世間が見せかけに腐心している」のに対し、見せかけを嫌い、「表面的なモダニストになろうとはしなかった。」つまり、瑛九は、「えかきであるよりも、市井の庶民のひとりであること」を選んだと貞次郎は見る。⁽¹⁰⁾

言い換えるなら、「社会の状況にみずから適応させようとはかることが不可能な率直さを身につけていた」し、その「強烈な自己表現の意欲が、かれをたえずそそのかし、自分をまげようと気を配るひまを与えなかった」。「非人間性、軽薄な風潮、アカデミックな権威主義を憎みながら、その空気をわき目もふらず」制作につき進んだ。これらは、貞次郎が自ら目指す生き方でもあった。

作家としての資質に触れるなら、「イメージの豊富さ」を挙げることができるであろう。貞次郎は、瑛九20歳半ばの初期フォト・デッサン集『眠りの理由』を例示し、フォルムの多様さに言及している。1950年代瑛九30歳代末の油彩画「夜どうし乗りつづけた自転車」や40歳代の8年間を費やした300種のエッチングに発展・展開した。

その間、2年で追及したリトグラフでは、単色のエッチングと違い、つねに多色に挑み、こども、150種を制作した。

晩年の2年間は、100号大の油彩画10数点の制作に費やした。色のマッサは「徐々に小さくなり、(中略)最後には点は極端に微小となり、あたかも銀河系」のようなイメージに近づいた。作者がそれらに与えた題名は、「れいめい」「たそがれ」「影」「雲」など、宇宙的な広がりを感じさせる。貞次郎は、これらを、「抽象表現主義」と見る。いわゆるニューヨーク・スタイルといわれる傾向では、行動のアクションによる表現を中心にすえたが、瑛九は、「最後まで微細な点のフォルムに固守し、そこに彼の思想の燃焼をやきつけた」。

最後に、この章を瑛九みずからの言葉でもって締めくくりにしたい。ある意味で、生涯青年の意気に燃えていた瑛九の芸術の根本が読み取れると同時に、それは芸術一般の普遍的な命題でもあるだろう。

「現実に対する批判の精神なしに芸術が成立するだろうか？すくなくとも現代芸術が成立するために、現実のわれわれの住む社会に対して、何等の批判なしに、何等の自己主張なしに、したがって世界観なしには不可能である。われわれは現代をみることなく、現代芸術を生むことはできない」⁽¹¹⁾

注

- (1) 富山県立近代美術館主催「第1回現代芸術祭—瀧口修造と戦後美術—」の会期は、1982年（昭和57）7月1日～9月15日。同館館報『どうむ』5号〔1982年（昭和57）7月発行〕参照。
- (2) この展覧会の関連企画は、次のようなものが予定されていた。「イベント・絵のある空間で一演劇・舞踊・音楽・現代詩」（7月31日午後6時～8時）／「イベント・音楽の夕べ」（8月7日午後6時～8時）解説・音楽評論家・多摩美術大学教授・秋山邦晴、演奏・グループ・アーク〔小泉浩、鈴木良昭、篠崎史子、山口恭範、高橋アキ〕／「イベント・詩の夕べ」（8月21日午後6時～8時）／「講演・瀧口さんとわたし」（7月10日午後2時）造形作家・筑波大学教授・山口勝弘／「講演・瀧口修造と戦後美術」（9月4日午後2時）。
出品作家については、展示区画を3区分し、それぞれのセクションを次の作家によって構成した。：セクション1（タケミヤ画廊、実験工房を中心とする作家）；瀧口修造、北代省三、利根山光人、藤松博、大辻清司、前田常作、福島秀子、山口勝弘、池田龍雄、吉仲太造、漆原英子、加納光於、榎本和子／セクション2（読売アンパンダン展を中心とする作家）；松沢有、篠原有司男、河原温、工藤哲巳、中西夏之、荒川修作、赤瀬川原平、田辺三太郎／セクション3（多様な資質の作家たち）；宮脇愛子、岡崎和郎、磯崎新、野中ユリ、合田佐和子、平沢淑子、四谷シモン／物故者；駒井哲郎。
- (3) 同展では、開催時には、実行委員として、東野、大岡、武満、秋山、山口5氏に池田を加え、6氏とした。この他、県内委員として、8氏を挙げた。同展カタログ組織表参照。
- (4) 展示およびカタログでは、「瀧口修造 オブジェショップ Rose Selavy—夢の漂流物—」とタイトルがあり、作家は、サム・フランシス、北脇昇、トワイエン、ジャスパー・ジョーンズ、ケイト・ミレット、小牧源太郎、高松次郎、阿部展也、ハンス・ベルメール、マン・レイ、ルチオ・フォンターナ、瑛九、ムナリー、アンリ・ミショー、浜田浜雄、小山田二郎、篠原佳尾、中江嘉男＝上野紀子など。
- (5) こののち、同家の作品、オブジェ類は、富山県立近代美術館に、書籍類は、多摩美術大学附属図書館に寄贈された。瀧口夫人の仮寓の別室には、老哲学者・宇野収が住んでいた。
- (6) 「瑛九略歴」（久保貞次郎『瑛九と仲間たち』叢文社、1985年2月）を参考にした。
- (7) 「日本近代画壇のアウトサイダー」（『三枝博音記念論集／世界史における日本の文化』1964年）。
- (8) 同上書。
- (9) 「前衛の先駆者 瑛九」（『みずえ』1968年11月号）。p.26
- (10) 同上書。p.30
- (11) 同上書。p.34。『デモクラート』1号が初出。

参考文献（上記以外で筆者が通覧したもの）

外山卯三郎「瑛九のフォト・デッサンについて」（『眠りの理由』1936年）。
 久保、北尾、外山、宮崎『芸術家・瑛九』（瑛九講演会パンフレット）1950年。
 瀧口修造「瑛九のエッチング」『美術手帳』1953年。

久保貞次郎『芸術家瑛九』1959年。

針生一郎「瑛九」（『芸術新潮』1960年2月）。

瀧口修造「ひとつの軌跡」（『美術手帳』1960年5月）。

四宮潤一「瑛九の個展」（『美術ジャーナル』1960年5月）。

オノサト・トシノブ「瑛九の死」（『美術ジャーナル』1960年5月）。

『四人の作家』国立近代美術館，1960年。

「瑛九・特集」（『版画』版画友の会，1963年3月）。

『眠りの理由—瑛九研究季刊誌』，瑛九の会，1966年4月～68年6月。

久保貞次郎「瑛九」（『日本洋画百選』第4巻，三一書房，1966年）。

山田光春『瑛九伝—誕生，幼少年，渾沌期—1968年6月。』

瑛九作品



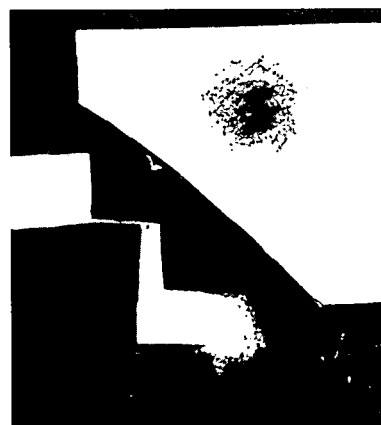
「作品」 1944



「作品」 1949



「女の顔」 C.1953



「アブトラクト」 C.1953



「花」 C.1953



「槓」 1954



「島」 1954



「指の目」 1955

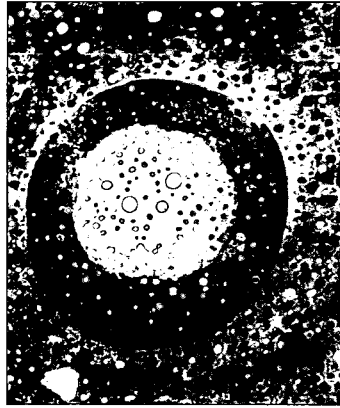


「手鏡を持つ女」 1950代

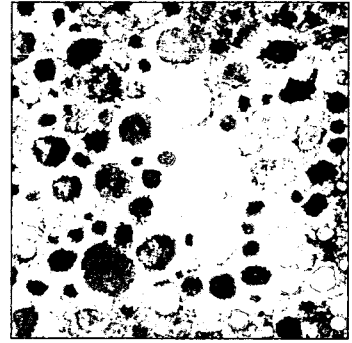
瑛九作品



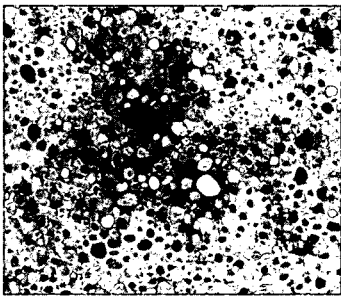
「踊るひと」1950代



「れいめい」1957



「黄色い花」1957～1958



「作品」1958



「流れ—たそがれ」1959

A study on Kubo Sadajiro

Masakatsu OTA*

Abstract

Kubo, Sadajiro (1909~1997) was one of the famous art educators after the World War II in Japan.

He believed that the most important thing is liberation from oppression. He thought he could see the freedom of children's feelings and thinking through their art works. He promoted the expressional power centered art education and denied the teaching policy of copying models of exemplary works.

He lead the great number of art educators and art teachers in the 1950s and 1960s in Japan. In this thesis the author would like to verify the meanings of kubo's concepts and thoughts of art education.

* Division of Music and Arts, Department of Art and Design